

LIVE: JURASSIC JADE 1994.7.15 目黒LIVE STATION



photo by k.k.

雨が降らない季節 HIZUMI

雨が降らない季節
トタン屋根の箱は踊り
老犬は死ぬ
すべての体液が干上がり女はひび割れる

水魚は白い腹を見せ
打ち寄せられる
男が腹を渡したせ最後の一滴をふりしぼる

雨が降らない季節

丘へ上って生き延びた者の子孫たちが
海水に群がる
泳ぐ仕事で人生をかき分け
女は街で生き抜く

雨が降らない季節
まかれた種を大地が拒む
男のスルマを私が拒む

胎の中で絡む毒も無く
えにしが途絶える
臨終を渡える老妻も
かつては女だったのか
経血の鉄の匂いを嗅ぎ
涙に濡をなめる
そんな女だったのか

ライブ前にHIZUMIが「私たちの、日の当たる場所で明るく元気に仕事をして、明るく遊んでという正のエネルギーとはちがう負のエネルギーですから」と語ってくれたが、「でもその負のエネルギーは人間の根源に深くかかっているものですよ」とときどき「それは人間のプリミティブなものでもありますからね」と答えてくれた。人間がその負のエネルギーからひきおこされてくるものを正のエネルギーに組みこんでいこうとしたのが文明の歴史で、私たちはプリミティブなものからどんどん遠ざかり、いまや人工的な正のエネルギーにすっかりやられてしまっているように見える。

ライブがはじまり、HIZUMIが客席の方から裸足でステージに上った。HIZUMI自身の言葉を借りれば「負のエネルギー」を放射させて、歌を叫んだ。髪の毛がザワザワ、頭皮がザワザワ、体中の毛穴がザワザワして止まらなかった。「AFTER KILLING MAN」を歌う前にHIZUMIが「私の人生のテーマである『親殺し』の歌」といったとき、負のエネルギーの核心に触れたと思った。負のエネルギー、すなわち人類の存続の否定、歴史の否定。負のエネルギー、すなわち子を産むことを罪悪と叫ぶこと、負のエネルギー、すなわち母親を殺すこと。それらを察知した。HIZUMIの踊りは、親殺しの祈り。そこには人類から人工的な明るさを奪い去り、原初の人間が畏怖れた真の暗黒が感じとれた。負のエネルギーの存在があまりに恐ろしいものは正のエネルギーではなかった。まさしく負のエネルギーの根源をこそあきらかにした。負のエネルギーも極まれば「生命」を燃えさせる。死こそが生であった。こんなこといまままでに実感したことがない。涙と鼻水で顔がグシグシになった。ライブが終わったときには膝はガクガクになっていて、ハハハと口で息をしていた。

LIVE: 白痴 1994.9.21 下北沢屋根裏

photo by k.k.

前回(7月28日)のライブはバンドとしてのすばらしさ、ギターやベースやドラムのすばらしさが強く、それもとてもよかったのだが、この日は白痴の世界がとくにヴォーカルで伝わってきて、その世界は怖いという感じだった。これだけいろいろなものが機械化され、人工的な明るさがほとんどの部分を照らしている都会の中に恐ろしい闇があって、ひょいとしたすきにそこにひきこまれてしまおうな、よんだ沼の中から手がのびてきて、足をつかまれ、沼の中にひきずりこまれてしまうような。白痴にはそんな恐怖がある。HORRIE(元DEAD END)の世界と共通している恐怖で、ともに現実世界の平衡感覚を狂わせる。HORRIEは歌詞を自在に操るから、一種ひらかれた感じもあるのだが、白痴は歌詞を自在に操れない怨念のようなものが、その歌詞と歌い方にあられていて、その閉鎖性がよけいに怖い。あの精神風土、日本の恐怖である。

(白痴は去年の12月27日のライブで解散)



ARTICLE:「尾崎豊 血染めの遺書」(週刊文春)

去年の9月週刊文春が「尾崎豊 血染めの遺書」という記事を5回にわたって載せていた。尾崎豊の父と兄が尾崎豊は殺されたとして、再調査喚願署名キャンペーンをテレビ朝日でくりひろげ、10万人の署名が集まったという。そして、その「殺人」には尾崎豊の妻も関与しているようなことを主張したとのことである。文春は妻の方の主張「尾崎豊は自殺をした」という立場で、「血染めの遺書」を載せたりしていた。

私は、そういう「事の正否」には関心が無い。尾崎豊を、だれかの息子、弟、夫であるところからも、殺されたのか自殺したのかということからも離れて、一人の傑出した歌手、詩人というところから考えることにしか関心がない。センセーションをまきおこせれば何をやってもいい、視聴率をとれば何をやってもいい、というありかたに対してテレビや他のマスコミに対して、何かをいおうというつもりもない。

死体を解剖してその死因を見つける、そういう死因じゃない死因。尾崎豊は「『空虚』という死に至る病」で死んだのだ。テレビのキャンペーンに踊らされて署名をした10万人は「死に至る病」に患っている人間を、そうとは気づかずに神様あつかいし、自分たちの代弁者あつかいしてまつりあげていた鈍感なファンばかりなのだ。鈍感だからテレビのことをそのままのみにして、いわれるままに署名をしたり、尾崎豊の妻を脅迫したりできる。尾崎豊が傑出していたのは、他人に代弁してもらおうなどとせず、自分のことを自分の言葉で歌ったからだ。「自分自身であろう」としたからだ。自分自身であることと、社会通念が分裂し、自分自身でいられなくなると自分の歌を失う。それは「空虚」を抱えるということであり、時として死に至る。



EVENT:「KEEP THE LOFT」

PROPAGANDA SIGNAL SERIESを開催するにあたって

立ちたくてもなかなか立てなかった新宿ロフトのステージに立てるようになって、もう10年以上の時が流れました。そして今年の7月10日に日比谷の野音で行われた「KEEP THE LOFT」にも参加させてもらいました。すばらしいイベントだったと思います。そこで、日頃さんごん書誌になっているロフトのために、先輩の仕切りではなく、来年結成10年を迎えるG.D.のJOEとして何かできることはないかと考えました。それが、このPROPAGANDA SIGNAL SERIESです。現存するバンドで映画ではなく商業ベースにもならない(ロックはビジネスとして成立しなければいけないのだけれど...) 友人関係のバンドを集めたイベントです。日本の音楽状況もこの10年でみると変わり、5年程前のバンドブームではギターを持って1年のプロミュージシャンが生まれ、今何故バンドなのか、何故このメンバーでなければこの音が出せないかを知ろうともしない人達に囲まれ、多くのバンドが消えていきました。しかし、そのバンドブームがあるろうが、なかならうが、自分達なりのポリシーを今も発信し続けているバンドで、その中でも、このイベントの出演バンドは男臭く硬派な連中、敢ある音楽誌に笑顔では頼らないような連中による不器用な企画です。何が何でも何を失ってはいけないかをステージ上の温度で少しでも多くの人達に伝えていきたいと思えます。是非観に来てください。ハンガリーな俺達にできることとして、収益金の一部でロフトのために(ロフトのまわりが汚いと書かれているのなら)清掃器具を寄付したいと思えます。



立ち退きを迫られているロフトのためにバンドマンが何かやるのはいいが、「バンドブームがあるろうが、なかならうが、自分達なりのポリシーを今も発信し続けているバンドで、その中でも、このイベントの出演バンドは男臭く硬派な連中、敢ある音楽誌に笑顔では頼らないような連中による不器用な企画です」なんてことを言うならその音楽をちゃんとやれて思う。JOEは「新宿ロフトのステージに立てるようになって、もう10年以上の時が流れ」たというのに、ロックな音楽をやっていないじゃないか。このイベントのチラシにコメントを載せているなかでもっとも音楽をやっているのはOKIだけじゃないか。仲野茂にしたっていまだに「アナーキー」の遺産を食い潰している2代目みたいなことしかやっていない。みんなただバンドをやっているだけで、それも長くやっているから、あの日本のロックの中心をきどるエラソーな態度のロフトでわがもの顔でダム口してられるだけじゃないか。

ある場所を特別なものとしてまつりあげるのは、その場所でイイ思いをしている人間たちがそれをなくしたくないために、中味(ロフトの場合は音楽)がなくなって空洞化していることをゴマカすためである。そして、その空洞化に気づかず、その場所をありがたがる受け身の人間たちがそれに乗っかる。新宿ロフトがJOEの言うように今でも本当に立ちたくてもなかなか立てない場所であるのなら、中味のある音楽をいつも聴ける場所であるのなら「KEEP THE LOFT」という声は、お気に入りのバンドマンがいつから署名をすとか、さもさもロックらしく見えるようにお膳立てされたイベントに行くとか、そんな受け身ではない観客の側からもあがるはずである。

「KEEP THE LOFT」は新宿ロフトとロフトお気に入りのバンドマンたちが馴れあったイベントであって、ロックンロールとは何の関係もない建物の存続問題でしかない。

チラシにコメントを載せているバンドメンバー: Shizuko Miyazaki, Akihiro (THE STREET BRATS) & 44 (THE DOG'S), 赤坂(44) & 44 (THE DOG'S), 渡辺(44) & 44 (THE DOG'S), 渡辺(44) & 44 (THE DOG'S)